

## ●アイヌ民族の歴史&アイヌの父と慕われたジョン・バチェラー

暑い日々が続いていますが、お元気でいらっしゃいますか？

7月2日の北海道支援者の集いの後、たまっていた事務処理や、原稿書きなどに追われましたが、実家に滞在していたので、家族との幸いな時も持つことが許されました。

6月にPBAの北海道ラリーで各地を回らせていただいたとき、私は、道産子(どさんこ)であるにもかかわらず、北海道のことを少ししか知らないことに気が付きました。それで、先日、「ほっかいどう百年物語」(北海道の歴史を刻んだ人々、STVラジオ編、中西出版)の第四巻を購入しました。なぜ第四巻目かといいますと、その中に、「アイヌの父」と呼ばれたイギリス人宣教師、ジョン・バチェラーについての記述があったからです。今日は、少し長くなりますが、皆さんがあまりご存じないと思われるアイヌ民族について、そして、そのアイヌ救済に命をかけたジョン・バチェラー師の紹介をさせていただきたいと思います。

## ●アイヌ民族の歴史

近年、DNA 鑑定の結果、縄文時代の人々が、アイヌ人の祖先ではないかと言われているそうです。和人の記録にアイヌの人たちが現れるようになったのは、約700年前です。

和人とアイヌの摩擦は、すでに北海道開拓以前からありました。

15世紀の鎌倉時代に、北海道の館(現在の函館市、上磯町、上ノ国町、松前町など)で、「北の戦国時代」と呼ばれる戦いが100年にわたって続きました。その一番大きな戦いが、「コシャマインの戦い」と呼ばれる戦いで、最後にアイヌは敗れました。

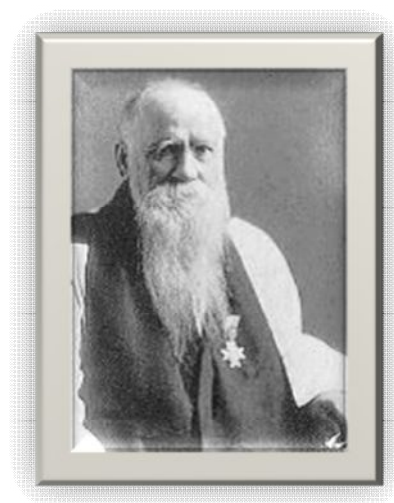
徳川幕府時代、豊臣秀吉から蝦夷島(道南)の支配者としての地位を認められた松前慶広(前、蠣崎慶広)によって、アイヌ民族は松前藩の管理下に置かれました。松前藩は、和人地と蝦夷地(アイヌの地)を区分し、アイヌ民族支配を強化しました。アイヌ民族は、米と鮭の交換レートを改悪され、それに抵抗した戦いが、「シャクシャインの戦い」です。しかし、松前軍は偽りの和睦を結び、酒宴の場でシャクシャインを暗殺し、アイヌ軍は敗北しました。

18世紀に入ると、不当な交換レートと漁場での強制労働を強いられ、出稼ぎ労働を余儀なくされたアイヌ民族は、1789年、「クナシリ・メナシの戦い」を起こします。その2ヶ月後、和人を殺したとされるアイヌ人37人が処刑されました。これが、アイヌ民族の和人に対する最後の戦いとなりました。

1869（明治2）年、明治政府は、蝦夷地を北海道と改め、**開拓吏**を設置、**アイヌ民族同化政策**をとります。この政策は、アイヌ民族も国家の構成員とし、**1）アイヌ民族の伝統的生活風俗習慣の否定 2）伝統的狩猟・漁労の禁止 3）農耕の奨励**を基本方針としました。

1871（明治4）年、政府は、アイヌ民族の呼称を「**旧土人**」に統一、アイヌの人々が生活してきた土地を国家が取り上げ、和人に私有権を認めました。アイヌ民族は土地を取り上げられ、農耕だけでは生計を立てることができなくなったため、栄養失調、疫病による死者が増加しました。

1899（明治32）年、「**北海道旧土人保護法**」が制定され、アイヌ民族を日本の「**臣民**」として認可、教育と農業化によって困窮から彼らを救済しようとしたが、アイヌ民族の困窮はさらに進行しました。



### （アイヌの父と慕われたジョン・バチェラー）

そのような中で、1877（明治10）年、イギリス人宣教師ジョン・バチェラー夫妻が来道し、アイヌの人々の悲惨な生活と病や差別に苦しむ姿を見て、それを改善するために、明治から昭和にわたって、アイヌ民族の保護を訴え、アイヌ民族救済に大きな貢献をしました。

平取では、バチェラーの伝道と働きによって、多くのアイヌ人たちがキリストを信じるようになりました。バチェラーは、ここに自費で教会を建て、次の伝道地、伊達町有珠でも、アイヌの人々のために教会を建てました。今、伊達市では、バチェラーの建てた教会が、ジョン・バチェラー記念館として保存され、平取町では、彼の名を取った「バチェラー保育園」が開設されています。

明治22年、人々にアイヌ語を知ってもらうために、日本語と英語に翻訳した**アイヌ語辞書**を編纂しました。このことによって、和人はもとより、世界中にアイヌのことが知られるようになり、その後のアイヌ語研究の糸口にもなってゆきました。

明治25年に札幌に転居したバチェラーは、自宅の隣に、アイヌ民族のために、無料の診療所を開設しました。その彼の熱心さに賛同する人々の協力は増えてゆきました。札幌市立病院院長もボランティア診療をしたため、評判は全道に広がりました。遠方からたくさんのアイヌの人々がやってくるようになり、患者の多くが信仰に導かれ、身も心も癒されてゆきました。

同時に、自宅の別館に「**アイヌ・ガールズ・ホーム**」を建築し、身寄りのないアイヌ女子児童を引き取り、勉強を教えました。彼は、その中のひとり、向井八重子を養女に迎えました。以後、彼女は、**バチェラー八重子**として、父親を助け、各地で講演活動を行い、アイヌ民族救済を訴え続けました。

大正9年、バチェラーは、「**アイヌ教化団**」という、アイヌ民族に中等学校以上の教育を受けさせる救援団体をつくりました。その先駆けとして建てられたのが、**バチェラー学園**です。この学園が

ら、昭和15年に閉館されるまで、多くのアイヌの青少年が、教師、獣医、無線技師などとして、未来へ向かって羽ばたいてゆきました。

大正12年、70歳のバチェラーは宣教師を退職してからも、アイヌ民族救済活動を続け、札幌に骨を埋めるつもりでいましたが、昭和15年、第二次世界大戦による反英感情が高まる中、帰国を余儀なくされました。「必ず戻る。」と養女、八重子に言い残しましたが、終戦を待たず、昭和19年に、享年90歳で故郷イギリスで天に召されました。

---

いよいよ、22日にドイツに戻ります。ドイツでは、7月31日に、マリア福音姉妹会でのイスラエル・サンデー、8月4日～7日は、ヨーロッパ・キリスト者の集いに参加する予定です。どうぞ祝された時となりますようお祈りください。次回のメルマガは、少し夏休みをいただいた後、一ヶ月後にお送りさせていただきます。

暑い中、皆様のご健康が守られ、主にあって幸いな日々を過ごされますようにとお祈り申し上げます。

イエス様のご愛と祝福が、皆様と共にありますように！

工藤篤子